

～愛でる～

6 花火千夜一夜



河野 晴行
KONO Haruyuki | 社団法人日本煙火協会専務理事/花火師

夜空に打ち揚げられる花火の「あかり」は昔から日本人に愛され続け、今なお全国で盛んに行われている行事である。日本の花火はその美しさで世界にも認められている。また手筒花火などの伝統花火もある。花火の起源や歴史はどのようなものだったのだろうか。

花火の美学

私たちの住んでいる日本の気候風土は、四季という素晴らしい環境を持っており、日本の文化にとっても四季は欠かせない存在だと思います。風物詩という言葉も英語に直訳できない、日本人の感性の豊かさが生んだ言葉ではないでしょうか。春は桜、秋は紅葉、冬は雪、そして夏は花火。花火は日本の言葉の文化である俳句において、夏の季語にもなっています。

四季の風物詩の中で唯一、人が作るもの、自然が織りなすものでないのが花火であります。花火は日本人が好きなものの一つです。日本人の美学は無常感、すなわち“はかなさ”にあるとも言われています。欧米の石の文化に比べ、木の文化である日本は、やがては朽ち果て、また新しいものを構築するとともに伝統は継承するという考えもあり、それらが日本人の花火好きの元ではないのでしょうか。そして火に対する畏敬の念も忘れてはならないと思います。

花火を揚げるそもそもの目的は、五穀豊穡、悪疫退散、天下太平などの祈りにも通じております。たかが花火、されど花火。大衆文化にはこのような美学があることを我々プロの花火師も、忘れてはならないことです。

花火の起源

花火の起源は、まずは火薬の発明以降ということになりますが、もっとさかのぼれば紀元前の“のろし”に到達します。のろしは、紀元前221年に秦の始皇帝が全土を統一した際に、北方民族の侵入防止のため築いた万里の長城の要所要所に“のろし台”が



写真1 ワイルドスターマイン

設けられ、敵の侵入を味方に知らせるために薪を焚いて、昼は煙、夜は火の光で信号を送りました。その際に加えたのが、黒色火薬の主原料である硝石(硝酸カリウム)だったと推測されます。

中国ではこの硝石を焚火などに入れると、特別な燃え方をすると古くから言われておりました。やがて錬金術及び不老長寿の丹薬作りの錬丹術における副産物として、黒色火薬が生まれたと言われております。その後黒色火薬はシルクロードを経てオリエントに至り、ギリシャ・ローマで軍事的利用と観賞用の利用、すなわち花火の用途に分かれたものと思

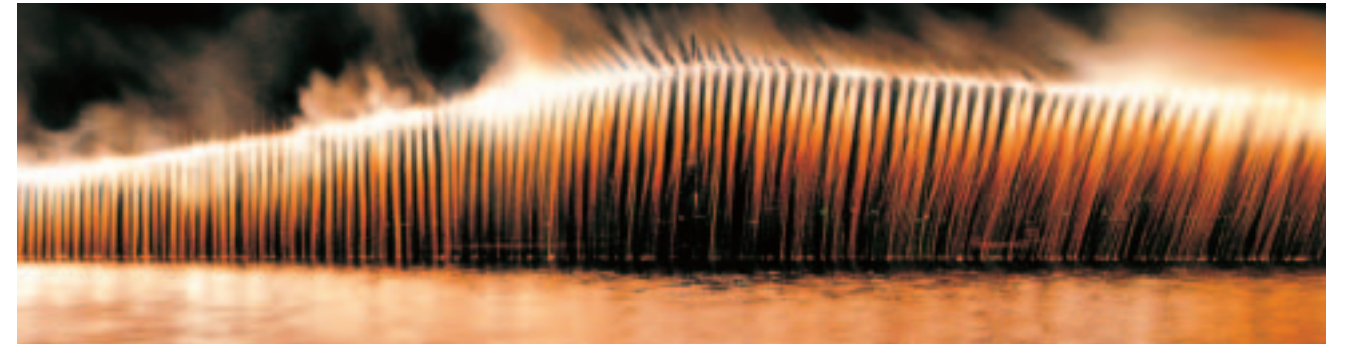


写真2 仕掛花火のナイアガラ瀑布

われます。

最初の花火はイタリアのフィレンツェで、宗教行事の一環として行われたと言われております。現在でも行われていますが、どちらかというと仕掛花火が主体です。このフィレンツェが花火発祥の地で、その後ヨーロッパ全土に広がったという説もあります。それらを正確に記述した文献はありませんが、古い歴史があることは事実です。

現在もイタリアの花火は、最もヨーロッパ的な花火として世界的に有名で、日本の花火とは形状こそ違いますが、色彩が素晴らしく表現力も豊かで、花火師の職人気質も日本の職人気質によく似ていると思います。

日本の花火の歴史

日本の花火の歴史は、まずいつ日本に火薬が伝来したかから始まります。我々がよく聞くのが、1543年に種子島にポルトガル船が漂着し、火縄銃が伝来したことです。倭寇が持ち込んだという説もあります。いずれにせよ16世紀ということになり、火縄銃を見た当時の日本人は大変な驚きだったと想像されます。そして火縄銃に使用されていた火薬、すなわち黒色火薬の存在を知ったわけです。

やがて火縄銃とそれに付随した技術は当時の対外貿易の要所といえる堺の商人によって、戦国大名の間に短期間のうちに広まったものと思われ、その役割に雑賀衆や根来衆が係わったと言われております。戦国大名の中でも織田信長は鉄砲の導入に特に先進的で、種子島に鉄砲が伝来した32年後には鉄砲隊3,000人を編成し長篠の戦いで武田軍に勝利し、日本の歴史に大きな影響を与えました。

このような鉄砲の伝来と、それに使用された黒色火薬の普及は大体分かりますが、日本の花火の起源となりますと、いつごろ伝えられたか、最初に花火が行われたのはいつごろか、残念ながら正確には分かっておりません。



写真3 大小の火薬玉

しかし歴史書によりますと、1613年8月3日に明国の商人が、イギリス人を案内して駿府城に徳川家康を訪ね、鉄砲や望遠鏡などを献上し、2回目に訪ねた8月6日には明国人が城の中で花火を行い、家康が見物したと記録にあります。また、それより24年前の1589年7月に、伊達政宗が唐人の献じた花火を4回にわたり楽しんだという記録や、1582年に現在の大阪府にあったイエズス会の聖堂で、ポルトガル人宣教師が花火仕掛で明るい色を出し、人々を驚かせたという記録があるそうです。しかし複数文献の整合性などから、家康が見物したものが、花火に関する最も古い正確な記録と言われているようです。

明国人が案内したイギリス人の名前はジョン・セーリスと言い、イギリス国王ジェームス1世の使者として国書を持って来日した人です。その国書が大英博物館に現存しているそうです。

この時行われた花火は正確には分かりませんが、文献によると“花火を立てた”と書かれていることから、固定した筒から火の粉を噴出する、噴出型花火で、専門的に言えば“立火”と思われるものが、家康の本拠地である三河地区、いわゆる愛知県東部・静岡県西部地域で現在も盛んに行われている手筒花火や大筒花火です。これらは黒色火薬系の噴出薬を詰めた木製の筒を、大型のものは地上に設置し火花を空高く噴出させ、小型のものは人が手や脇に抱え

噴出させる勇壮な伝統花火です。

また、三河地区は徳川家臣団の“稲富流”などの鉄砲隊が複数存在していた状況からも、花火の技術を培う立地条件が整っていた土地と言えます。そしてそれらの花火の原型は、やがて日本人の手で作られるようになり、自分たちが花火を楽しむだけでなく、商品としても当時の大都市である江戸の町で一般に流行するに至りました。

家康が花火を見た35年後の1648年には、火災予防の観点から江戸の町で花火を禁止した記録もあり、以後数回にわたり禁止令が出たことからも、いかに流行していたかが分かります。当時市中で売られていた花火は、現在でもポピュラーな“ねずみ花火”や“線香花火”などが主流でした。

また当時は、大川（隅田川）河畔のみ花火が許可されていたため、豪商らが茶屋から納涼船を出し、花火師を乗せ“流星”などの花火見物を楽しんでおり、浮世絵などでもその様子が描かれています。

花火大会の始まり

花火大会という言葉はおそらく日本独特の言い回しではないかと思えます。欧米では花火ショーあるいは花火フェスティバルという表現が多いと感じます。いずれにしても、イベントとして花火を行うにはスポンサーが必要となります。江戸時代では羽振りの良い豪商とか札差が、いわゆるスポンサーに当たります。

芭蕉の高弟・宝井其角(1661～1707)が花火を詠んだ句に「一両が花火間もなき光かな」というのがありますが、一両を花火のためにパッと使う江戸っ子の心意気が感じられ、江戸の町で花火が受ける理由が分かる気がします。

そして全国の花火大会のルーツと言える両国川開きの花火が行われることとなります。川開き(旧暦5月28日)に、花火を揚げるようになったのは1733年からとされています。

この前年には、全国的な大飢饉があり餓死者が90万人に達し、江戸ではコレラ病(コレラ)が大流行して多くの死者を出しました。8代将軍吉宗は悪疫退散祈願と死者の霊を慰めるために両国橋付近の大川で水神祭を催し、両岸の水茶屋もこれに協賛して川施餓鬼を行い追善供養



写真5 カナダ、オンタリオ湖にて。現地の花火師と(1994年)



写真6 ドイツ、デュッセルドルフにて(1987年)

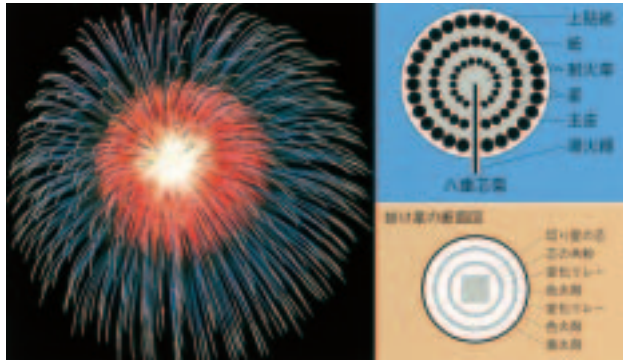


写真4 八重芯菊花型花火のしくみ

し、余興に花火を揚げたのが始まりであります。

以後水神祭、川施餓鬼にちなんで川開きに花火を揚げるのが年中行事になりました。年々規模も増し、江戸の風物詩として全国に周知され、それぞれの地方での花火開催の刺激になったと思われます。ちなみに当初の花火の数は20発程度と言われております。

花火の進歩

花火はがん具と観賞する用途に分かれます。がん具花火は子供たちが町中で使用することから、火薬の量や効果に制限があることは言うまでもありませんが、鑑賞する花火には目覚ましい進歩があります。

両国の川開き初期に揚がった花火は、ほとんどが竹竿の先に花火を仕込んだものなどの、いわゆる仕掛花火でした。現在のように玉に火薬を詰めて打ち揚げる本格的な花火が登場したのは、1750年以降と言われております。18世紀、日本の花火は試行錯誤を重ね、円球状に火薬を詰め丸く開かせる割もの技術、すなわち菊花型花火の完成に向かいます。

明治時代になり、西洋から化学薬品が輸入され、花火の色彩などに格段の技術進歩をもたらします。特に塩素酸カリウムの輸入は、花火の産業革命でもあります。そして20世紀に至り、ついに世界に誇る日本の割もの花火の最高傑作と言われる八重芯菊花型花火、すなわち丸く開いた菊の中心に芯が二重に入った花火の完成に至ります。



写真7 電気点火の操作盤



写真8 スターマインのセッティング

現代花火事情

現代の花火はご存じのとおり、日本全国で開催されている花火大会、イベントの花火、ステージ等で効果として使用する花火など多種多様となっています。

海外でも日本の花火は最高レベルとの評判で、昭和30～40年代には輸出産業の一角でしたが、現在はコストの安い中国製が世界のマーケットを握っております。しかし芸術的、技術的レベルは日本の花火が一番との評価を得ております。

頻繁にはありませんが文化交流の一環として、日本の花火を海外で打ち揚げることもあり、私も世界約10カ国で打ち揚げてきました。いずれも大好評で、花火の写真が翌日に現地新聞の第一面を飾ったことも多々ありました。日本の花火は1発1発の完成度が高く、特に秋田県の大曲や茨城県の土浦での全国花火競技大会では、日本の花火技術の集大成を見ることができます。そして最高傑作と言われた八



写真10 多摩川の花火大会



写真9 乱玉

重芯菊花型花火は、現在さらに三重、四重、五重の芯を持つ花火に進化しております。

最近は打ち揚げ技術としてコンピュータを使用することも多くなってきました。これはアメリカの花火ショーとしての発想から、音楽と花火をシンクロさせるための究極の技術で、花火の良し悪しよりも演出効果を主眼に置いたものです。

これはこれで素晴らしい技術とは思いますが、やはり1発で表現する日本の花火の心を大切にしたいと思う今日このごろであります。日本の花火は豪快な打ち揚げ花火だけでなく、手筒花火や竜勢花火などの伝統花火も脈々と続いており、大切な文化と自負しております。機会がありましたら、そのような伝統花火や歴史のある花火大会をぜひご覧になって下さい。ショーアップされた花火との違いが分かると思います。

こんな話があります。小説家がある老花火師に「花火とは」と質問したところ「人の一生を空に打ち揚げている様なものだよ」と答えたそうです。つまり、派手な1発もあれば、地味な1発もあるということです。

日本人の花火に対する感情は、桜の花に代表されるような、はかなく消えゆくものに対する美意識と共通するものがあります。日本の花火はそうした精神文化を大切に、将来に向かい、より一層の芸術的な探究と技術的な進展を続けていくものと確信しております。

<資料提供>

写真1、2、3、4、7、8、9 日本煙火芸術協会「日本の花火」パンフレット
写真5、6 筆者
写真10 初芝成應